

# 集中治療室入室患者の体温変化と術後精神障害の発生との関係について

著者	赤澤 千春
発行年	2000-03-27
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10422/334">http://hdl.handle.net/10422/334</a>

## 論文内容要旨

※整理番号	1	(ふりがな) 氏 名	あ か ざ わ ち は る 春 赤 澤 千 春
修士論文題目	集中治療室入室患者の体温変化と術後精神障害の発生との関係について		
<p>I 目的</p> <p>近年の医療技術の進歩に伴い肝臓・食道・心臓疾患などのハイリスク手術、高齢者の手術、合併症を持つ患者の手術が可能になった。その結果、身体的な危険性の増大と、精神的な問題として術後精神障害が問題となっている。生命力が消耗しやすい状態にある患者に術後精神障害生じることが、回復過程を遅らせるばかりでなく、生命をも脅かすことになる重要な術後の問題である。これまでの研究では発生の要因や誘因についてなされており、その誘因に睡眠障害があると報告されている。今回、この睡眠障害は睡眠-覚醒リズムの障害とも考え、このリズムに影響を及ぼすものとして手術時から変動の大きい体温との関係について検討した。</p> <p>II 方法</p> <p>1998年1年間のK大学病院集中治療室に入室した患者373名について一般的な発生要因の検索を行い、術後精神障害の発生の有無別に入室期間の長い者よりそれぞれ42名、計84名の体温変動を時系列曲線よりデトレンド法で交流成分（変動成分）と直流成分に分け、変動成分で周期を求めた。</p> <p>III 結果</p> <p>373名の一般的な発生要因では年齢、ドレーンの有無、術後精神障害の発生時に良く使われる薬剤使用状況で有意差があった。ただ、入室期間の長い者で検討すると年齢で有意差はなくなり、気管内チューブ挿管、疾患、入室期間、持続硬膜外チューブ挿入、ドレーンの有無で有意差が見られた。術後精神障害を発生の有無ごとの体温の直流成分をみると術後精神障害のあったものは時間とともに低下する傾向にあった。また、体温変動の周期は術後精神障害を発生した患者では15.45±12.91時間、術後精神障害を発生しない患者で19.4±8.77時間であったが、両者の間には有意な差は見られなかった。</p> <p>IV 考察</p> <p>発生率は他の研究とほぼ同じ結果で、年齢や入室期間が延びると様々な要因が発生要因となりやすいことが示唆された。術後精神障害を発生する患者の体温は下降する傾向にあり、これは症状が好転し回復に向かっていることが示唆された。そして術後精神障害を発生する患者の体温周期は15.4時間と24時間の体温リズムの健康人より短かった。このことは睡眠-覚醒リズムは体温リズムの影響を受けるため、体温の低下が短い周期から24時間の社会生活の周期への睡眠-覚醒リズムのスイッチを入れるタイミングを逃し、睡眠障害機能的な精神障害を引き起こすと考えられる。</p> <p>V 総括</p> <p>術後精神障害の発生に睡眠障害が深くかかわっており、それを誘発するのが睡眠-覚醒リズムの障害で、そのリズムに影響を与える体温の調整とともに、社会的同調因子を有効に利用してリズム修正することが重要である。</p>			

(備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字以内)  
2. ※印の欄には記入しないこと。